

毎月一日発行
発行所
宗像大社
福岡県宗像郡玄海町
電話 神湊 26番
定価 一年 送料共500円

大内裏の朱雀において行れ、六月を名鑑(寛延)十二月年越つたの故と言われ来た。また大赦の人は腹割つてれに心身がけれをつけて河海に流すのである。異言は乃人紙で作れりも

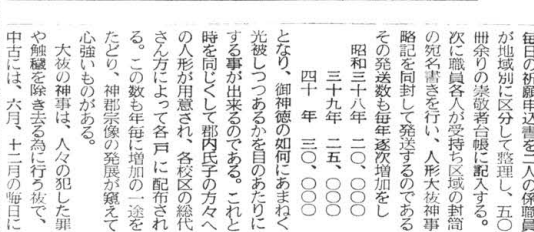
製形(國王)がある。これより上りて過此では形骸の神事が如何に上りか行れいたか助助助助助に立証することが出来るのである。

この出稿ある社の大被神事(今までの)のタリ(客)の

罪、穢祓いの人形
 発送始まる

師走の風と共に今年の年越しの大夜近すいた。
大社では、この大社の神事に先立つ二十三日余りの十月十日に全国各地の崇敬者に向けて、昭和四十年年越しの大夜の人形を送送する。この人形は紅白二色で男は白、女は紅の人形に家の全員氏名配入し息吹を吹きかけて期期々々日までに大社に返送して頂く事になっている。

人形送送までの諸準備は、先ず



のを用いているが上古は石製のものもあり、著名なものとしては当大社沖津宮に奉獻されてた約千

行く人形共に一刻の後に足邊に注ぎ入り忘却の淵に沈む事だろう。そして亦人々はその新装を氣持で新しい年を迎えるのであ

大神のまへに年を送りけり

案 近

んネ」とおセカイなママ連「
出張しています」とさげない返
事で逃けたのに、何納限の何舞室
耳底に徹る声張の法師舞人に真心
じりて我もバスに乗り降り
十余菊をすれば観る人も花も移
宮 田 片山 一

空高く飛び渡つた去々十月の二十九日、山口県宇部市交通局の構内、端に鎮座されている後神社の秋の大祭が当大社の司祭に齋行された。

宇部市は本州の端端、山口県の西部にあつて、瀬戸内海に面し、かつ東西市街が發展している。その昔、宇部炭田の開発につれて大正十一年一月宇部村から二

ときどきお見舞い参上。満期
の娘入を持つ母親は、酔っ
ぱりの交通事故による入院は佛
に知られなごむ。一遠慮あ
るせ。○小学生の作文「ママの

尽せたと鳴く
福岡 登
高橋
南郷 幸
中村
尾郷 須恵
戸畑 山磨 昌子

れり舞も老なり
落さんとしどめ村の内に
船子器かと振りしめをり

日清戦争の陸戦も海戦も、やむにやまれぬ弱小国日本の奮起であつた。海上での優勢なる清国海軍と

かつて國民に愛唱された歌（勇
敵な水兵、今日の若い人達は、
概ね知らないだろうが、歌詞作
者は後年の小宮原長生中將、若い
海軍少校にして歌詞を作ったのは
水兵三輪虎次郎）

「戦い今ははたなわに、つとめ
尽せるますとおの、響き血も申
板は、かくれぬに、船れあり
たまたかくの飛散りて、あま
たの身を身に負て、その玉の緒
を勇氣も、つとめとてたる勇士
をたしかめ、死なんとする情眼、

あり、副艦長の過ゆくを、痛む
まに、にひとめが、肉をはり上
げ彼は時、まだ芽芽や定達は
「副艦長は忽ちの間、断末摩の叫
びに恥ぢも慄も感へた國時の人
間愛に心を捕へたるのであつた
悲壯な祖国の運命を賭けた敵
戦のさか、敵弾を浴びて重傷の
身を甲板へ横たへ、今まさに鬼雄
なりとする、戦水兵が、甲板を走
りゆく小宮原艦長に敵の聲を
聞かぬやうに、

興隆を賭けた一戦。その中に生命
を祖国に懸けた、個人の犠牲を超
越して戦つた幾多の若者達、
祖国を外敵の暴圧から守り通さ
ぬ断念が、敵敵連達の仕末となつ
たのである、

ねて終末摩の叫びでつながつてあ
る。鬼雄なる寸前の信問、それはは
た個人の個人状況でもあり、大
きく國家の社會の相違もある。
當人の個性性の相違でもある。
鬼雄なる寸前の信問こそ、一切の
人間生活の絆を超越した純粋重責

信仰とは、それが人間自然の愛情から発動し信仰である限り、いさゝかの虚偽も偽装も伴ふない。

人間の真実の姿を表現するに於ては、人間に生き方の方が重要として、多くの虚偽な作爲がある。それが多量のいさゝき條線を重ねて、習慣化してると、一の信念の如く身に染つてしまふ。然し終極、それは同他すべてを満足させることにはならない。ここに眞實吐露して唯しい信仰の中に宗教ではない。

一隊長が走りかたしました。感情衝動場を行へる何か悲愴とか、敵中の隊長と部下の連絡が止まぬやう言葉を期待した。天晴天下歳の人の会話が簡単に。

壯年最後の戦いを纏めていくのは兵士を激励するために、言ひかけたのに、答へは

の偶に見てゆくひまはない、とある。母は「お母さん」といふとき、最愛の母を呼んだときほど助かならない。

賞められたし、勳章ももらった。無量の栄誉のもとに、周囲の人々にも聞かされたため書に閉居する人は、死の前にたゞ人間の真実ではない「お母さん」は、見絶える寸前、人間の信仰である、愛情の声である。

生命のやりとりは好むことではない。然し世界中の民族が争つた

の静けさである。嵐の中に生きた人間のとちよと死は大事で、何人にとっても死は大事であると同様、死に直して、何を考え、何を訴えんとするか。それ場合によらず人も作風にも必要となる。再び人に顔を向せる時にない人間生活の終極の時勢を、信実の表現として聞かせし、聞き逃したものである。

| | | | |
|--|--|--|---|
| <p>氣に感してはなぬが、きりとて 熟慮不斷行身身の破滅なる。亦 源浪士ノ襟袷は、別な女情 熱の花でしてはたす。○國家安 の鐙銘、家康を呪する字と、 減にハシテ一字の旗印、武力による 世征征服とインネをつけれ て惨敗。世間平和の交をも、うか つて囁き過ぎでは、どんなインネ づつがくも暇らぬ。物言えん 晴笑し秋の風と聞かが、冬の風 はもつと身に海なる。(白費)</p> | <p>花果の葉は土落たり 福岡 城 望東子 行き交える車に想念に消え ゆくが、夜窓辺に 宮田 北原さみ子 木屑の弾く、此のあゝ簫古 しの丹津張板、張る 津屋崎 麦野 時雄 豊後富士湖の光照りかゝり の網あやかく、あやゆ 厚 秋 篠田 南洲 茶瓶下げ膳路を行く兄弟の幼なき 足取り仔細の知し</p> | <p>福岡 江崎 琴子 昼くもつてす学ばけなきに 春高き柳の肩をすりて 飯塚 萩本 た夕照 海南に潮れ立ちたる大船の庭 に重くはたためく 神楽 蘭船 俊</p> | <p>釣川の防は土瀬潮沙吹浪さか りけり今年の砂や 吉田 占部 由久 対岸の町の屋並は朝霧に影はろ うにて残灯だけ (四段下段へつゝ)</p> |
|--|--|--|---|

仰げばすがし秋晴れの空
出の中睦子幼し

学校が交通事故で入院した。毎
 日学友の帰途、病院に立寄る。
 「あなは感心な人、毎日の友情
 が羨しい」と若い看護婦がほめる
 と「や友情はベッドの上では見
 えず、食べられぬ食で代つて食
 べに来るが」との言。これも亦
 正直な愛、やはり感である。
 村山田 金丸 柳威
 燐酩の原料となむ薩摩路の続け
 る限り日語多し
 武 丸 立石 昇
 赤黄きつかりどりに載り替て白
 布はしつかに秋空に勝つ
 津屋崎 勝田 光一
 それぞれ懐愁の姿態して十二
 神将我にぞ宿れ
 田 熊 小野角次郎
 夏冬の衣類行く田島露子の
 手を引き老の土麗を
 小野 花居
 秋の山峠の小停さみ入れはまな
 き木々も紅葉を
 伊 須須ゆき
 水撒きし隣門に羽の足舞ひ降
 り歩む脚の短し

○親戚に似たお若いお宅の
ご主人。この頃お父が見えま
せんとおせす。カインマム連一
出張していますと、とりかへない返
事で済んだのに、何故か鶴の何事か
とつきをめて、お見舞い上。渡鶴
期の娘入を持つ母は、酔っぱ
ライのし通事故によふ院は他人
に知らなうなる。○遠慮あ
はせ。○小学生作文「ママの
福間 須恵
尾郷
植恵
酒に生き、酒に終りし弟の墓前に
登
高橋
岡
福
足
村山
吉田佐市郎
今一年水は寒さは、この日は金
婚式を思ふたぐれ
それぐの婿に生くる中になま
じりて我もふたしに乘の騎り
十餘年菊を植は頼る人も花も移
り替へぬやれば
宮田 片山 一
南郷 中村 幸
落さんとしてとりめすの内に
腦子器かどへ履りしめなり
戸畑 山磨 昌子

おでこになくそ描いている
「おでこババが言つてから、マ
マのうんがが言つて。ママ
はちががつよひので、ババがま
けた。ママはもっととえるとい
ふなあ、ババはもっととえるとい
いなあ」○子供は表現は純心だ
が、人間が世に処する上に、言い
にくいことを敢えて述べねばなら
ない。

（草子）吉留　白木うめ

打ては響きゆく行かれぬ君助と
書きては夢をよしくくりなり

戸畑　田中ハッセ

朝もやの静謐地なる丘へ妻と夫
向きのめい体操を始む

朝町　井上陽之助

冷水のまきつゝのあめのがしき
よ心にかかる雲二つなし

吉留　白木うめ

木原の枝の秀に立つし鳥馬の黄
の小花を散して飛びたつ

丸　立石ろせの

千年の雨霧風雨にさらされて童顏
保つ白柱朽灰

吉武　原田　松代

春煙えし葉顔は秋の陽に照らさ
て花にも降り赤くも原田

原田　リノ

ゆつくりと見の白なかり　朝顔の

又失せたらぬ。此の神様
 を、失せたらぬ。口へグチに
 なる。あゝの終は神様もさへ
 〇男子の一生は情熱が燃え上つ
 た時に、快い爛爛の花が咲く。だ
 がその熱い妻女も母性で泣かされ
 る場合が多い。思ふなり、人生意
 氣に感じはならぬが、きりとて
 熟慮不斷行身身の破綻なる。赤
 穂浪士の英雄拳は、分別なき情
 行き交ふる車の音に想念に消れ
 五十の年輪を見し
 江口 辻野 開道
 東郷 藤崎 辰子
 福岡 城 望東子
 母にくもくけず學ぶがゆさに
 春高き甥の肩をすりて
 枯れて汚さるるを除けり
 香椎 桜井 秀
 山ひだに振すがつて思ける
 蟲の家々に螢の灯がうつ
 桜井 子子
 福岡 江崎 琴子

を熱の花ではなかな。○國家安樂の
鐘鐃、家康を呪つた文字と、
インネをうけられて、豊後家は
滅亡八紘一宇の旗印、武力による
世界征服とインネをつつけられ
て惨敗。世界平和の文も、うか
つに唱へ過つては、どんなインネ
の縛あやかし、光り
豊後黨土曜日の牙利へかし有肌
厚 狹 篠田 南洞
足取り仔細の如し

宮 田 北原さき子
木犀の強く匂ふ此のあたへ讀古
しの丹前張板へ張る
津屋崎 麦野 時雄
釣川の防は水、海頭沙咲美さか
りけり 吉田の秋や
今 田 占部 由久
対岸の町の陽は朝露に影はほろ
にて残灯うつむ

飯塚 萩本 夕照
高南に濡れてなたる大藏の庭
に重くはたたく
神 湊 隣船 俊

(四段下へつゝ)

倉田主税会長の半生記

一部であるのかと、思ふまで分配しようとしたのだ。いかん車独裁にひたしい時局下とはいへながら、日立はそれと似た企てである。事業会社である。何ら何でも、車に乗り渡してはおぼろげではないのである。小以下の最前線部隊は、会社経営者としての責任感と、非常時祖国に対する覚悟が、平時的工場困つていた。然し、「困つた」では済まされないのだ。平時戦場において必ず然りとすれば、それ「藩閥」をくりあげ、毎車に對するような形になつていゝといふ悪俗的なものにとどまらず、実戦の上においてはマナツチスを買ったか、強烈な体となつて協力すべき管の面が、常任役員として入るものであるから、作戰上の臨入といふとはなかつた。むしろムスには行かなかつた。

— 60 号を迎えた宗像誌 —

玉砂利を踏み足音も聲もやかかな新年の挨拶を交へ乍ら、謔男の初詣でが終り、襷の袖の晴初日に映えて美しかった。

又、絶海の孤島を沖津宮宮受付正面を広くして参拝の便を計つた。この為社頭の一新した。

一方、待望久かつた如津宮祭
祀圖出土品を中心に、元日より
開催した宝物館は、一月に三千人
余の拝観者を集め、文化財保護審
議会として「日本の設備」と折
紙付きの館内には、世界に比類な
き鏡、玉、金の指類を展示し、
揮毫者に当社古代信仰の雄大さを
知しめた。

各報津機関も驚く足を通ひ、各
紙に当社宝物類が大きく取り上げ
られたもの（項）あり。

博多人形の第一人者として知ら
れる名匠小島平一氏が繪舞人々を
奉納され、宝物館に花を添えた。

畏が湧き出された。長閑なお彼岸
の中、日宗宗町老木本・木宗縁風
間にテレビを寄贈した。当日は
度大相撲春場所千秋楽、販買り老
う達はこの喜ばれ、賑員一同さ
やかくと温いものを胸に感じ
て帰社したのであった。

初秋は陽気然るべし、昭和四
十年若布が新装なる「東京御所」
に於て、この日を為年初頭
より総経理等々、威厳の中若布を
よくみ立て努力が報へられた者
の、梅の花咲き誇る天長の
に、

駐 彭 来

負けず多数難い来て、生懸命
 紫園の花咲く頃準備、取り掛
 中津宮た揮舞へ、各地
 の多数の参加者を得て開催さ
 ぬ。
 今年はこの行事が開催されて十
 年になり、出品物も多数、幼
 少の顔を力めて書かれた数々の
 作品が奉納され盛況を博した。な
 この会の発展の急力表で、千
 秋
 花が、後援者氏の表
 式が併せて行われた。総社境内
 市場拡張事は五月の第一次理
 議の
 残
 放生

意をこめての参拜であつた。
 暑氣しき頃、量もみれ祭、
 会の準備である。恒例の行事
 云、一ツ年の共手拔かりが
 是てはなぬ。種々打合せ、祭
 意、異等と云つてはおれ
 今日、西、明は東の燕蔭組
 生である。宇佐郡七浦漁協組
 始め各種の協力を得て端々と
 は進む。

長月、表千家道家元即中斎
 左宗匠にふ獻茶祭查行、此
 には種々華やかな振袖姿の
 咲き、神散るに神域も女の圍
 した。

「**A 君**「まあいいさ」
K 君「ところでその下駄の裏側をよく読んでおて下さい」
A 君「裏側を見て」
「何々、ええと、この下駄を無断で使った場合は、一回に付二百円を徴収する、シェー」
A 君「**K 君**をにらみつけて」
「納めりゃいいんでしょ、納めりゃ、月賦で払うかたレナ」
○先生「皆さんはどんなテレビ番組が好きですか？」
生徒「**G 君**「ミシャルの入らないのが好き」
先生「……」

が総社主殿に於て着くされ本年から育生事業を拡大し多くの生徒がこの恩恵を浴する事となった。

この日の十日、空像会発展の為多大の奉仕をなされた八幡宗像会長 安水隆氏が急逝された。享年六十八才で亡られた。深き御冥福をお祈りする次第である。宗談話室は「せんげしり」の新登場、世その「せんげし」のはのぼした人間味をおくりする事となった。


因にこんな様な人物は慈賀局神社の先賢中島である。

富浦町・頃大馬路中宮倉庫を学習場として英数学部を開設、中津宮主任松村寛吉を講師に小中学

立に
了る
風
た
参
い
ら
中
交
運

高麗から秋割れの十月、恒々あり祭意行、年々参加する数は益々、本年は五百五十船が参加、宗像水軍の威容は比に紹介され、九州青鬼の気合いに暗示され、みあれ放生会を終る、愈々秋のめづりに入、打掛高島や、かなドレスに胸を望む、神秘なカッパル誕生、駒子でのろろ、又秋の一日、宗像会館記念撮影会開。美人ルネ参加、美しく輝いた、多めのカラムンが顔を競

二月、当社小種積司が転任



された。本誌は創刊者であり、育てたの親でもあった小野氏に深甚の謝意を贈る次第である。

毎号連掲の阿婆少言の辛辣な風刺はフアの刮目する所であるが、時折、社説評論から編輯者の茶飯事に迄及ぶ事があって物議を醸すこともある。

案もあれ、本誌六十号を以つて今年には暮れる。御函援下さる読者各位に御礼申し上げると共に、来年がより一年となる様に深くお祈り申し上げる次第である

写真説明

上段正月初詣つての車、一段あやめ、三段草花、四段秋の鎮国寺、下段大須領布式

